

ブックレビュー



『今を生きる思想 宮本常一 歴史は庶民がつくる』

畑中章宏 著
講談社 刊
定価 880円 (本体800円+税)

『宇沢弘文』を紹介した本欄23年2月号でも触れたが、「現代新書100 (ハンドレッド)」の新刊だ。①それは、どんな思想なのか (概論)、②なぜ、その思想が生まれたのか (時代背景)、③なぜ、その思想が今こそ読まれるべきなのか (現在への応用) をコンパクトにまとめている。宮本常一 (1907～81) は柳田国男や折口信夫、南方熊楠らによって発展していく日本の民俗学を独自の立場から展開した「旅する巨人」として知られる。

宮本は「見て、歩き、聞く」ことで庶民の歴史を丹念に発掘し、親しみやすい文体で膨大な記録を残した。その際に「カメラをメモがわりに使い、(中略) 記憶しておきたいものなどを何でも写して」歩いた。「人手の加わった自然には、どこかあたたかさがありなつかしさがある。わたしは自然に加えた人間の愛情の中から、庶民の歴史をかぎわけたい」

と綴っている。それが可能なラストチャンス¹の真っただ中に飛び込み、風のように各地を訪ね歩いた「旅人」だった。

著者によれば、宮本は「民具」(もの)に視線を注ぎ、『『もの』を民俗学の入り口』にして「物象の底に潜む生活意識と文化」に触れ、「風物」が伝える民衆の生活誌(史)を追求した。その軽やかなフィールドワークが残した山のような記録は宝箱だ。

未来社から刊行された双書『日本民衆史』などにもその一端がうかがえる。「開拓の歴史」「山に生きる人びと」「海に生きる人びと」「村のなりたち」「町のなりたち」「生業の歴史」「甘藷の歴史」「旅と行商」「すまいの歴史」「生活の知恵」「生産の知恵」「労働の歴史」など。「熱烈な好奇心」を内に秘めた「温かい眼差し」で紡がれた宮本ワールドの真髓に光を当てる本書から、今を生きる私たちのありようも確かめられる。

さんかいの げん
(山海野 玄)